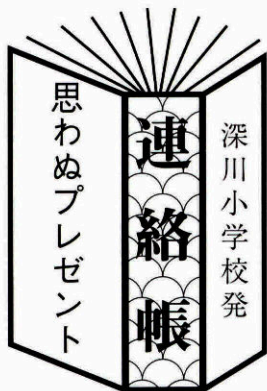


穂積 北斗 さん

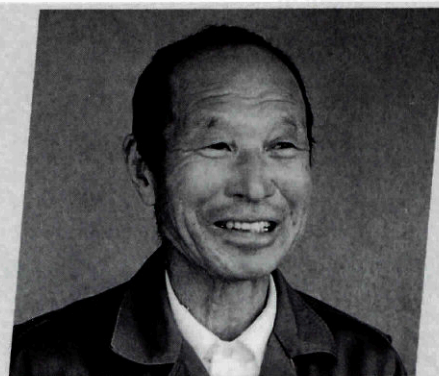
6年(上川西2区)

どの学年も、考えることは同じで、運動場は、数百人による『大雪遊び』になりました。手がまっ赤になるのも忘れて夢中になって遊んでいました。日頃、静かな友達が大声を出して、は

2月2日、久しぶりに大雪がふりました。1時間目は国語で詩を作る学習です。でも、みんな、運動場の雪が気になって仕方ありません。先生の「分かった、分かった。外に出よう」の一声で、みんな転がる様に運動場に出ました。



しゃいでいるのにびっくりしました。楽しかった6年間の小学校生活も、もう終わり。そんな時期の思わぬ雪のプレゼント。いろんな出来事とともに、多くの心のアルバムに収められることでしょう。



若い頃から農業一筋。1町6反の田と牛を11頭飼育している。今では、田は子どもに任せており、牛の世話が自分の仕事。「昔は、朝4時には起きて牛の世話から始まり、晩は8時頃まで農作業、今のように機械もなく骨を折ったもんです」昭和30年頃からは、木炭もつくり農協に出していた。他に燃料もなかったので、なかなかの金になったそうで「そうじゃないと、木を切って真っ黒になってまでやりませんよ」と笑う。

今まで大病をしたことはないが、今年風邪をひき、長引くのでとうとう医者にかかったとか。「歳をとると、抵抗力も弱くなったようで、なかなかぬけません」と。

食べ物は何でも食べる。ただ若い頃は、人參、パセリ、そしてア

ふるさとながと ②4

こんにちば

海を見ると心が落ち着きます



石村 恒久 さん
(福岡市東区)

略歴

昭和38年板持3区で生まれる。水産高校卒業後、コックを目指す。その後、美容師に転向し、各地で修行。現在、博多の美容院(株)TAYAY春日店でチーフ。

大きな街に溶けこんで生きていくと、見る間に月日は流れていきます。気がつくとも僕も結構な歳になり、長門を出てずいぶん経っていました。最近では、少しずつ親や田舎が恋しく思えてきたのか、年に4、5回くらい帰っています。ただ帰る度に街や自然の風景が変わってゆくので、驚きや寂しさを感じます。妙見山や只ノ浜の海岸線も、ここ10年ぐらいですっかり様子は変わりました。特に松林はほとんど無くなくなってしまい、そこでよく遊んでいた僕にとっては残念です。これは別に人的なものではなく、酸性雨とか松食い虫のせいだと思えますが、松がなくなると漁場にも影響が出ると聞けば心配にもなります。ほっておいてもだんだんと失われがちな自然です。無責任な言い



中学生の時に両親と

方ですが、できる限り自然を生かした開発を望みます。今、僕は博多湾が見える所に住んでいます。長門に比べるとずいぶんと汚い海でしょうが、それでも海を見ると心が落ち着きます。そうしていると、こちらへんで長門へ帰って、根を下ろしてみろかな...と思ったりするのです。最後に、永いこと心配や迷惑をかけてきた両親に、この紙面を借りてお詫びと感謝を。